

國學院大學學術情報リポジトリ

神道研究の国際的ネットワーク形成：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 魯, 成煥, 色, 音, テーウエン, マーク, ブリーン, ジョン, ベンテリー, ジョン, ナカイ, ケイト, ヘイヴンズ, ノルマン, 遠藤, 潤, 平藤, 喜久子, 武井, 順介, シッケタンツ, エリック, 加藤, 里美, 加瀬, 直弥, 松本, 久史, 真田, 治子, 稲場, 圭信, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000506

セッション3

神道研究のネットワーク作り

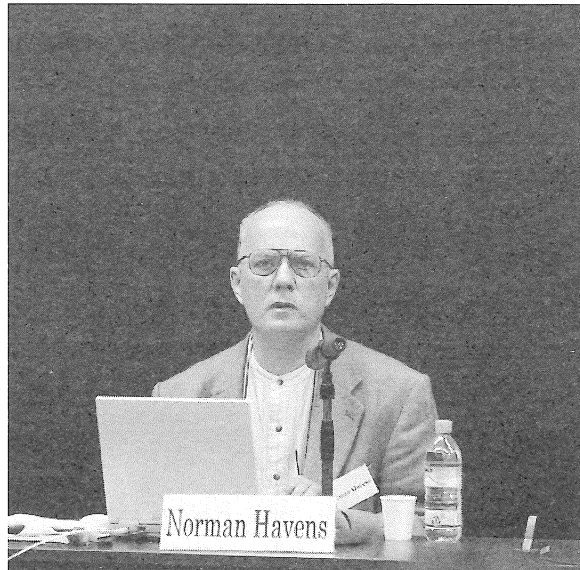
マーク・テーウェン

ノルウェー オスロ大学教授



【司会（ヘイヴンズ）】 第3セッションを始めたいと思います。

午前中には、東洋の立場から見た神道研究のネットワーキングについて論じられたのですが、午後のセッション3とセッション4では、欧米、ヨーロッパ、アメリカから見た神道研究のネットワークについてです。



最初に発表していただくのは、マーク・テーウェン先生です。テーウェン先生は、学士、修士、博士号をオランダのライデン大学で取得されてから、カーディフ大学で5年間、教鞭を取られていました。そして、1999年からノルウェーのオスロ大学の人文科学学部文化学と東洋言語学科の教授を務められています。学生時代には、皇学館大学で2年ほど研究生と嘱託研究員を務めたことがありました。日本の文化にも造詣が深く、外国人のなかでの中世神道研究第一人者は、おそらくテーウェン先生ではないかと思っています。先生の主要な著作として、例えば『平安後期における清めと祓え』、『中臣祓訓解』の翻訳と解題、あるいは『度会神道 外宮の思想史』という西洋の神道研究としては画期的なものを執筆されていらっしゃると思います。今日は、第3セッションとして、「神道研究のネットワーク作り」という題目で発表していただきます。どうぞ。

発題

マーク・テーウェン

【テーウェン】 ご紹介いただきましたノルウェー・オスロ大学のマーク・テーウェンと申します。ちょっと風邪を引いてしまって、声が途中で出なくなるかもしれないので、

短い話にさせていただきます。

ここ 10 年ぐらい、いろいろな形で神道に関する共同研究を進めてきました。本の編纂とか、雑誌の特別号の編纂などをやってまいりました。そして今日、お話しする神道国際学会の理事としても、神道研究のネットワークづくりを夢見てきました。ですが、残念ながら、少なくとも英語圏においては、神道研究のネットワークが軌道に乗っているとは言えないように思います。それはなぜなのでしょう。そして、そういうネットワークをつくるためには何ができるのでしょうか。

まず言っておかなければならないことは、神道を専門とする研究者は、他の研究分野に比べて日本にも多くないのですが、欧米にはなおさら少ないです。あまりにも研究者がなくて、ここに 1 人あそこに 1 人、というふうに世界中に散らばっています。ゆえに、ネットワークがなかなか出来づらくて、またネットワークができないから、新しい研究者が育たないといった悪循環に陥っているような気がします。神道研究の専門家を養成するのがネットワークづくりの最もふさわしい目的なのかどうかは後で議論してみたい点ですが、それはさておき、研究を支える研究者のネットワークが十分に機能していないことは決して無視できない問題だと確信しています。特に最近の研究機関の研究援助の方針としては、研究者とか、研究生 1 人のプロジェクトは優先されないという傾向が広がっています。ですから、神道をテーマにした小さな企画は、ネットワークを使った大きなプロジェクトとの競争には勝てないことが多いです。それが理由で博士課程の学生も集まらない、そういう実情があると思います。

このような状況の中で、まとまった共同プロジェクトは必要不可欠になります。20 年前だったら、まだ私みたいに 1 人で本を書いて博士号を取ることがまだ可能だったのですが、現在ではそれがどんどん難しくなっています。ですから、研究ネットワークが機能して初めて、神道研究に関するプロジェクトが可能になって、研究も充実していく道が開けていくでしょう。そういうわけで、神道研究のネットワーク構築の必要性を痛感しています。

ネットワークづくりの鍵は、日本から海外に情報を一方的に流すのではなくて、日本と海外の研究者の間の対話と協力のほかにありません。本日のような国際シンポジウムは、あまりにもまれです。国学院大学の COE のプログラム以外には、国際的な活動を行っている団体組織として、先にも挙げた神道国際学会しかないような気がします。私個人の経験は、この神道国際学会のネットワークづくりに限られていますので、その経験を省みて、幾つか気がついたこと、喜んだこと、悩んだことなどについて簡単にお話ししたいと思います。もちろん、このペーパーは神道国際学会の理事会の総意を代表するようなものではなくて、私個人の見解でしかないことを付け加えておきます。

神道国際学会を初めて知ったのは 12 年前の 1994 年、その学会が設立された年です。ロンドン大学の国際シンポジウムに聴講者として参加した際、神道国際学会の神道観といたしますか、神道の理解は私の理解とは大分離れていると印象を受けました。その後、今日もここにいらっしゃるグリーン先生から声をかけられて、東京で「欧米における神道研究」について発表を依頼されました。もう十何年前のことですが。そのときに私が自分の意見

を述べたときに、その後にかなり激しい厳しい批判も含めた応答がありました。そのときは、私と神道国際学会との縁は切れてしまった、と思っていたのですが、その後数カ月経って、理事になりませんかと逆に頼まれましたので、そういうことだったらと喜んで引き受けました。

その後は大学の仕事に追われながらであったため、理事としての責任は十分に果たすことはできなかったように思いますが、少なくとも神道国際学会の多くの活動に参加してきた経験がありますので、そのメリットと弱点について率直な意見を述べさせていただきたいと思います。

まずは、神道国際学会という組織が、神道研究の国際的なネットワークをつくるのに具体的なイニシアティブを取ったこと自体には大きな意味があったと思います。神道国際学会の設立趣意を見ますと、それは驚くほど意欲的なものです。言ってみれば、国際シンポジウムを開催すること、海外の研究者を日本に招くこと、神道に関する文献を提供すること、翻訳すること、それはあまり目新しい企画ではなかったのですが、若手の神道研究者を養成すること、そして海外の有力大学に神道に関する講座を設立するように働きかけることなどは他に類を見なかった点だと思います。

今、12年がたち振り返ってみれば、その趣意項目のいくつかは確かに達成されています。日本でも海外でも数々の国際シンポジウムが開かれました。この学会のニューヨーク支部が国連における神道の顔になったといっても言い過ぎではないでしょう。そして、かなりの数の大学図書館に『神道大系』が寄贈されています。さらに、カリフォルニア大学のサンタ・バーバラ校に神道国際学会神道学講座という講座が1997年に設立されて、欧米では神道研究の第一人者である、そして神道国際学会理事アラン・グラパールさん（Allan Grapard）が、この講座を受け持つことになりました。そして中国でも、1998年に浙江大学で「神道と日本文化」という講座が開始して、毎年行われています。ついこの間、浙江大学で大きな研究大会をやりました。そして翌年の99年には、ロンドン大学日本宗教研究センターが開設されました。これも神道国際学会を通して起こった出来事です。そして2001年にモスクワにも代表部ができて、そこでもいろいろな活動が行われています。

神道国際学会が、これらの企画を通して日本以外の神道研究の活性化に貢献したことは疑い得ないと思います。もっと喜ばしいのは、もともと神道を専門にしていなかった研究者たちの積極的な参加があったことです。日本仏教研究で有名なベルナルド・フォールさん（Bernard Faure）、阿部龍一さんとマイケル・パイさん（Michael Pye）が理事にまでなっていて、神道に目を向けてくださったことが、これからの欧米における神道研究に大きな刺激を与えていくでしょう。

もう一つの貴重な結果として、英語圏以外の研究者との交流が可能になったということです。神道国際学会が積極的に中国、韓国、ロシアなどの研究者を招待して、また中国やロシアでセミナーなどを開いて、今までなかった対話や交流を可能にしてきました。

もちろん不満や問題も少なくありません。そのいくつかの点をここで取り上げてみたいと思います。

午前中の会議から受けた印象の1つとしては、韓国でも中国でも、神道に対する一般向けの啓蒙的な活動が必要だというテーマがありました。神道国際学会も、そういう考えから始まった団体なのです。実はそれがかなり難しくて、啓蒙活動と学術活動のバランスをとることが神道国際学会にとっては1つの大きな問題だったと思います。そこで、あまりいいバランスがとれてなかったというのが、大きな悩み事の1つだったのですね。ですから、神道国際学会は学会でありながら、啓蒙的な活動も並行して行ってきたのです。それはなぜかといいますと、神道の研究を促進するのだったら、神道を体験させることによって興味を持ってもらうことがまず先決だと考えていたためです。それ自体は必ずしも間違った考えとは言えないでしょうが、実際には、実践者と研究者の関心、神道の見方、アジェンダなどに大きなギャップがあって、その協力の形式を考えるのには、いろいろと難しい問題が浮上してきました。

神道国際学会では、学者である外国勢と実践者である（または実践者でもある）日本勢の対立という感じのセミナー、シンポジウムも少なくありませんでした。その中で特に日本の純粋な研究者は必ずしも居心地がよくなって、違和感を覚えた方も多かったかと思います。ですから、研究者が実践者の邪魔をしたり、学術活動が啓蒙活動の邪魔になったり、反対に実践者が研究者の邪魔になることもありました。そういう催しものは中途半端な結果となってしまう、それは神道国際学会の目的にも適していませんでした。

神道国際学会は、特に日本の中で「ちゃんとした学会」としては認められていないように思えます。その大事な理由が、この実践と研究の混乱にあるかと思います。そこで一昨年の2004年に神道国際学会の改革をして、啓蒙的な活動を行う部門と学術的な活動に集中する部門に分けてしまいました。法律手続上の理由で、啓蒙的部門はISF（International Shinto Foundation）という英語名を継承して、学術的部門は神道国際学会という日本語名を継いでいくことになりました。ややこしいやり方なのですが、手続きが大変なので、そういうことになったということです。この改革は行われたばかりなので、その結果はまだはっきりとした形では出てきていないようです。言ってみれば、予算が2つの団体に分けられて半減して、それぞれの部門の活動範囲が限られていく恐れがありますし、この改革を機会に、新しいスポンサーを探さなければならないでしょう。

ですが、それでも神道国際学会の新しいタイプの催しものとして、去年の秋、東京で行われたセミナーを紹介してみたいと思います。参加したメンバーが、自分の神道研究について発表して、そして神道国際学会を通して自分で選んだディスカッサント、日本側の研究者にコメントをしてもらいました。このセミナーでは、海外の研究者と日本の研究者の対話がまさに学術的な環境で成り立ったと思います。日本側の研究者も積極的に参加してくださって、まことに価値のあるイベントだったと思います。このようなイベントは神道研究の国際化に貢献して、新しい成果を生んでいく可能性を十分にはらんでいるに違いありません。重ねて申し上げますが、啓蒙部門と学術部門のバランスという点は神道国際学会の活動に影響を与えてきたのですが、最近新しい動きが見えてきて、解決の可能性を示唆しているように思います。

ですが、もう1つの課題は、先にも触れたスポンサーのことです。これはもっと解決しにくい問題なのかもしれません。お金がかかってくると大体難しい話になりますね。

神道国際学会の理事の顔ぶれを見ますと、まことに幅広くて、神社界から教派神道まで、中国からノルウェーまで、民俗学から思想史まで多様性に富んでいます。しかし、学会の財源は、この多様性を反映せずに、会員の会員費を除いては多くはたったの1つのスポンサーが提供しています。ご存じのとおり、ワールドメイトで有名な深見東州氏です。1つの収入源に頼らざるを得ない現状は、いろいろな意味で残念です。深見氏がイベントの内容に携わらないという方針は、神道国際学会が啓蒙部門と学術部門に分かれる以前から変わっていませんし、深見氏が神道国際学会の表舞台から遠ざかって久しいです。実は2004年に深見氏が学術活動と啓蒙活動を分けることに同意して、みずから神道国際学会から理事も副会長も退任しました。しかしながら、外部の目から見ると深見氏がこの学会のオーナーのように映ってしまう、そういうことには変わりはないでしょう。深見氏が長年にわたって神道国際学会のすべての活動を可能にしましたが、深見氏自身も強調しているとおり、神道国際学会がワールドメイトだけに依存し続ければ、その信憑性が損なわれる恐れがあります。

そこで実際には、今年、ユニバーシティー・オブ・ハワイ・プレスから *Nanzan Guide To Japanese Religions* というすばらしい教科書が最近出版されましたが、その中で、今日の司会のノルマン・ヘイヴンズさんが同じことを指摘しておられます。その文章をちょっと映していただけますか。

まずは、神道国際学会のおかげで、新しい研究がいろいろ出てきたのは間違いないのですが、そこで unfortunately のところから読んでいただきたいのですが、

“unfortunately, the foundation’s work has not been without controversy due to continuing allegations of a lack of transparency in the relationship of Foundation to the religious group Worldmate (aka Cosmomate)”.

ということで、深見東州氏がやっている新宗教団体ですね。一応、a lack of transparency ということですが、NPO法人として、神道国際学会は毎年、会員総会できちんと事業や収支の報告をして、その事業と収支を印刷して会員に配っていますので、法律上の transparency は行き届いているとは思いますが、別に何かを隠しているわけではありません。それにしても神道国際学会がワールドメイトに依存している限りは、その活動が場合によって疑わしく思われる恐れが消えないので、1人のスポンサーに依存していく道は長く続かないと思います。そこが1つの大きな問題だと思います。

今日のセミナーでは別にお金の募集をしているわけではないので、そういう具体的な問題の解決方法を考えるにはふさわしい場ではないでしょうが、もっと一般的なレベルで、神道国際学会の問題に見習うべきことがあると思います。

民間のスポンサーで行うネットワークづくりには、それなりの限界があるでしょう。純粋な学術会議のほかに、大衆向けのイベントも期待される。それはごくごく自然なことだと思います。学者として、そういったイベントに参加すると、必ずしも自分は同意できな

いような主張などに、その場にいることによって正当性を与えてしまうかのような立場に立たされることもあります。しかし、こういうイベントにおいては学術会議でもまれなぐらいオープンな議論が起こることも少なくありません。その議論の結果がまた学術会議に持ち越されれば、刺激に富んだ対話のもとにもなれます。民間のスポンサーに頼っている神道国際学会の限界が見えてきたところで、そのオープンな性格にも目を向けていただきたいと思います。活発なネットワークのモデルとして、それなりの問題を抱えながらも、習うべき面も多くあるように思います。

その中で特に強調したいのは、この学会が神道そのものをオープンに解釈しているということです。言い換えてみれば、神道研究のネットワークの目的は、狭い神道学をつくって、広めていくということであってはならないと思います。神道学の専門家を育てようとするよりも、神道を専門としない研究者に声をかけて、いわば「神道的なテーマ」について考えていただいたほうがおもしろくて、実り多いやり方ではないでしょうか。ですから、例えば神を話題にするにしても、神道の中の神々よりも、日蓮宗の中の神々とか、中世荘園の中の神々、近世文学の中の神々などなどについて、それぞれの専門家を集めて、オープンな議論をする。そういったやり方は考えられます。こういった研究の目的は、閉ざされた神道というカテゴリーを確定していくよりも、神道と部類される以前の具体的な現象が、どういう広がりをもって、いろいろなコンテキストで、どういう機能を果たしてきたのか、そういうことを学術的に調べていくことになります。そういった「神道的な」現象の例としては、例えば神祭りとか、神社組織とか、神祇神話などなどが挙げられます。絵馬でもいいですね。

このようなアプローチは神道研究に特にふさわしいように思います。もう一度、ヘイヴンズ氏の言葉を借りて言えば、神道とは何なのか、空気のようなものなのか、タマネギのようなものなのか、真珠のようなものなのかという議論をなさっていますが、見方によって極端に違ってしまうものです。ですから、タマネギをむいていく研究も大事ですが、ネットワークづくりを考えた場合は、神道ならざる神とか、神社、神話などの広がりを目に向けたほうが、対話の可能性を含んでいるのではないのでしょうか。

そして、午前の韓国と中国の事情から考えても、神道という言葉を挙げただけで、もうテーマが決まっていると現状があるようです。靖国神社に決まってしまうという現象もあるようです。ですから、神道研究というよりも、神社研究、神々の研究とか何でもいいのですが、特に国際的なネットワークをつくろうと思ったら、神道に関するいろいろな問題を取り上げるというような方法がありますよね。ですから、神道については書きたくないけれども、神社なら書く気があるとか、お祭りだったら韓国の祭りを紹介して、それと比較しましょうという気にもなれると。そういうことが多いような気がします。

先ほど日蓮宗の中の神々を例に挙げたのですが、例えば日蓮宗の専門家や、近世文学の専門家などにとって、神道という神学的・思想史的なカテゴリーは、自分の研究にとっては縁が薄いと思われるかもしれません。がしかし、神とか、神社とか、神話になると無縁ではなくなります。ですから、神道論を発達させていくよりも、神道以外のいろいろな分

野で、「神道的なもの」を考慮に入れてもらう試みのほうが、ネットワークに合った学際的な研究を可能にするでしょう。

そこで一歩進んでいけば、ネットワークに合った研究として、もう一つ、魯さんも挙げた比較研究もあります。井上先生が編纂なさった『神道——日本生まれの宗教システム』という神道史入門書の序説では、井上氏は、神道は東アジアを覆う大乘仏教圏の1つの産物と理解すべきだと強調しておられますが、私もまさにそのとおりだと思います。ですから、日本で起こった神道の誕生は、東アジアのコンテキストで見ますと、極めて意外な発展であったように思います。神道は、日本文化の自然な要素ではなくて、複雑な歴史の予想できない結果として生まれたもので、その生まれた過程を分析するには、比較研究は欠かせないと思います。

魯さんからの刺激に富んだ話の中では、もともと韓国とか、モンゴルにも神道のようなものがあったのですが、神道的なものは儒教などにカバーされて——歴史的な選択という言葉は積極的にお使いになりましたが——、歴史的な選択によって消された、絶滅させられる運命をたどったのだというお話をなさいました。それはまさにそうだと思いますね。だけれども、そこで韓国とか、モンゴルで、儒教以前の要素を掘り下げていくという作業ももちろんありますが、反対に、韓国やモンゴルにおける儒教文化圏の中の地方の祭祀とか、地方のお祭りとか、神社とかの運命を考えると、何で日本で神道という意外なものができて生き残ったのかという視点が初めて生まれる。それがどんなに特異な現象なのかが初めて見えてきますね。それは韓国みたいな儒教文化圏の中だけではなくて、仏教圏の中で考えても同じことが言えると思います。ですから、チベットでも、ミャンマーでも、東南アジアでも、神道のようなものが起こらなかった。何で日本が違ったのか。そういう比較研究が非常に研究方法として、新しい成果を出す道として有効であろうと思います。そういう比較研究は、もちろん日本だけではできない。外国だけでもできない。それこそネットワークを使った共同研究のテーマにふさわしいと思います。大きな共同プロジェクトができるようなテーマだと思います。

結論に入りますが、神道国際学会は、一応、オープンで学際的で国際的な神道研究を可能にするネットワークづくりを指向してきたと思います。その意味で、この学会がネットワークのモデルとして参考にできる要素を含んでいると思います。何よりも、日本と海外の研究者の対話を真剣に心がけてきたと思います。それと同時に、神道国際学会という組織のできる活動には限界があります。そして避けがたい問題もたくさんあります。理事として、今後もこの学会の学術部門の発展のために努力していきたいと思いますが、神道国際学会の限界を超えることもできる共同研究のネットワークの必要性も痛感しています。

そこで、国学院大学のCOEプログラムは、ほんとうに「渡りに舟」という感じでした。このプログラムで行われているネットワークづくりは民間の組織ではないので、神道国際学会のそれとは違った可能性、そして、それとは違った限界も抱えているでしょう。特に国学院大学の研究機関としての重みと権威があります。神道国際学会にはそれがない。ですから、その重みと権威をうまく利用して、海外の研究者のための橋渡しになっていた

いて、日本の中でも神道研究の国際化を図ることが可能だと思います。

そこで、外国人同士の神道研究のフォーラムをつくることにも、それなりの意味があるかもしれませんが、それで終わってはいけないと思います。最終的な目的は、神道を日本の国境を越えた国際的な研究テーマとして確立していくことでなければなりません。国学院のCOEプログラムと神道国際学会は言うまでもなく、競争相手ではなくて、同じ目的のために、それぞれ努力を重ねている機関で、性格の違った2つの組織としてお互いに刺激を与え、補い合いながら、そして協力もしながら、神道研究の国際化を可能にする舞台をつくっていただきたいと思います。以上です。

質疑応答

【司会（ハイヴンズ）】 ありがとうございます。テーウェン先生は、12年間の神道国際学会の理事としての経験に基づいて、その光と影といいますか、民間組織による研究の限界も含めて、1つのモデル、1つの例として取り上げた発表だったと思います。

今、15分ぐらい時間が残っていますので、質問あるいはコメントがある方はどうぞ手を挙げてください。はい、井上先生、どうぞ。

【井上】 神道国際学会の話伺いまして、私は、この問題は非常に厄介な問題と実は思っています。個人的にもテーウェンさんにはちょっと私なりの見解を申し上げたことがあります。

1つの問題は、確かにテーウェンさんたちがやっていらっしゃることは意義があると思うのですが、神道国際学会のスポンサーが1つかどうかということではなくて、そのスポンサーがどういう団体かと、むしろそちらだと思うのです。仮に神社本庁だけがある組織のスポンサーになったとすると、これも1つの団体といえば1つの団体になるでしょう。しかし、神社本庁はたとえば神社界では、一定の正統性を持ちます。つまり、スポンサーとなった団体の日本の社会における位置づけがどうかという問題です。その点をどう判断するかは、私は最終的には研究者個人の問題だと思います。

わかりやすい例で言いますと、仏教界でいえば、ご承知のように創価学会は非常に大きな資金を用いて海外でも活動を行っています。仏教各宗派がやっているよりも、はるかに国際的な研究者のネットワークづくりに貢献しています。しかしながら、依然として、創価学会の関係で集まった学者は、創価学会のために宣伝する研究者だとみなされる傾向が今でも私は強いと思うのです。だから、人口の4%ぐらいを占めるぐらいの大きな社会的勢力となった新宗教であっても、創価学会が持つ性格によって、そのような評価を受け続けている。

そうすると、ワールドメイトが、現在の日本社会でどういう評価を受けるかということが問われるわけです。スポンサーが1つという問題ではありません。さらに、これが単に新しい宗教だからということではないと思います。私は新宗教の研究者ですから、比較して言えば、新宗教の活動を肯定的に評価しているかもしれませんが、社会一般の評価は重視しています。その辺をテーウェンさんが、最初からどういうふうに認識されておったのか。ワールドメイトの活動内容がどのようなものか、ある程度内容を知っておられたのかどうか。そして知られるようになってから、いろいろ意見はあるけれども、自分としては、この活動は受け入れられるという評価をされたのか。それとも、活動内容は関係なく、研究の資金を得られるので、そこで活動しようということであつたのか。むろん、研究資金が得られるなら、どんな団体があまり気にしないという態度は、学者の間にもよく見られます。研究を優先するために、そういう方法をとるのだということに対しては、私は個人的な生き方の問題で、それにどうこう言う立場ではありません。

この場であえてテーウェンさんが、神道国際学会という名前を具体的に出していただいたので、私は本音のところでお聞きしたい。その上で、こういう問題を、今後、我々はどう対処していったらいいのかを考えたいわけです。実際、この学会を通じて、ネットワークを深くつくっておられるだけに、その点は確認させていただきたいと思います。

【テーウェン】 私としては、ワールドメイトは違法なことは行っていないというのが前提です。ですから、違法な団体ではなくて、日本にある新宗教の中の1つの援助を受けながら、そういう活動を行っていくと。神社本庁がやればいいではないですかとおっしゃるのですが、神社本庁はやりません。ですから、そういう国際的なネットワークを具体的につくろうとした初めての団体は、この神道国際学会なのですね。

それを問題にする学者と問題としない学者がいるのは、おっしゃるとおりですね。どちらかといいますと、外国人の中では問題にする学者は少ないような気がしますが、日本では、もうちょっとワールドメイトの活動も知られているせいとかはわかりませんが、携わりたくない学者もいるわけです。ですが、宗教団体からお金をもらって研究を行う法人はたくさんあると思います。創価学会だって、好きな人と嫌いな人があります。少なくとも、そこで決定的なのは、お金を出している人が、そのお金がひも付きかどうかですね。ですから、お金を出した人が、「私の神道観を宣伝してほしい」という前提では、学会はもちろん成り立ちません。神道国際学会は、実際にプランニングとか、催しものをつくっているのは、深見氏ではなくて、梅田善美氏とか、藺田稔氏などです。先にも申し上げましたが、顔ぶれの広い理事会なので、違法ではない限りは、気にはしながらも、やめる理由にはならないと私は思います。

それで、神社本庁がやればいいのということなのですが、神道国際学会のことは理事会の顔ぶれで判断してほしい。それが私の言いたいことですね。それで多分、こういう神道国際学会を神社本庁がやっていれば、広い顔ぶれの理事会はできなかったと思います。神社本庁は、そういうことをやるモチベーションはないような印象を受けます。

もちろん、ずっとだれかがやってくれないかということを考えていまして、今でも考えています。ですから、国学院がそういうことをやるようになり、本当にうれしいわけですよ。ですから今度は民間のところではなくて、正式なところがこれを本格的にやると、ある程度の基盤ができているから、もっと前進できるような気がします。

【稲場】 神戸大学の稲場圭信と申します。今のお話の中で、神道国際学会が啓蒙活動と学術部門を分けたという話でしたが、国連NGOに神道国際学会はなっていますね。

【テーウェン】 それはISFのことですね。それが啓蒙部門ですね。

【稲場】 それで、神道国際学会は、国連NGOの中の特別協議資格を持っている日本の宗教団体の1つとして入っています。関係団体としてね。総合協議資格を持っているオイスカと、ロスターのSGI (Soka Gakkai International) と、その3つが入っていると思うのですが、私の知る限りではですね。それからもう1つ、国連広報局のNGOとして、立正佼成会と神道国際学会が入っています。国連関係でNGOとして2つに神道国際学会は入っている。そうすると先ほど、2つに部門を分けたということになると、国連関係の

NGOとして、その2つがすみ分けをしているのか、それとも両方ともISFが担っているのか。そこら辺はどうでしょうか。

【テーウェン】 多分、両方ともアメリカのほうの団体がISFになって、アメリカの活動は全部、ISFがやって、神道国際学会は日本に本部を持って、日本で活動が行われているという形になっていると思います。

【稲場】 そうすると、国連のNGOは2つともISFがやっているということですね。

【テーウェン】 そうだと思います。

【司会（ヘイヴンズ）】 そのほかにありますか。

【藤田】 宗教取材をしていますカメラマンでライターの藤田庄市といいます。私はワールドメイト関連の訴訟に関係した一人です。『世界』を発行する岩波書店と『サイゾー』を発行するインフォバーンという会社の訴訟関連の2件です。それは私個人のことなのですが、まず違法なことをやっていなければいいというのは、違法というのは刑事犯罪という意味でしょうか。つまり刑事犯罪を犯さなければ構わないよということですか。

【テーウェン】 私は別にワールドメイトの話をしに来たわけではなくて、神道国際学会の話をしに来たのです。ですから、神道国際学会の神道研究ネットワークづくりがモデルになれるいい面も、悪い面もあるという話をしてくて、別に深見東州氏がどうのこうのという話をするにはあまり興味がないわけです。ですから、さっきも創価学会や立正佼成会の話が出てきたのですが、訴訟を起こしたり、起こされる宗教団体は山ほどあって、反対に言えば、訴訟に負けたことがない、あるいは勝ったことがない宗教団体はないでしょう、と私は思います。ただ、確かにそこは神道国際学会の痛いところなのですね。それに依存してしまっているということが。それがよくない。

ですが、例えばさっきのヘイヴンズ氏の文章のなかで、クラウス・アントーニさん(Klaus Antoni)の書評が出てきたのですが、私とジョン・グリーンが出した *Shinto in History* という論文集の書評ですね。その書評のなかでは、深見東州氏の話を持ってきて、深見東州が裏で神道国際学会にかかわっているものだから、こういうことが書いてあるはずだというような書き方をなさっています。そういうやり方はアンフェアだと思いますし、学術的なやり方ではないと思いますね。ですから.....。

【藤田】 いや、私が質問したいのは、そういうことでも何でもなくて、井上さんの質問を受けての質問ですから。それにお答えにならないので、時間もないですから、ちょっと一言だけ申し上げたい。

皆さん方——皆さん方というのは、外国と日本を含めての研究者がやってきたこと——というのは、客観的機能としてワールドメイトと深見の社会的信用を高めること。つまり、イチジクの葉っぱ(fig leaf)であるということ。それから2つ目には、教団内に対しても教祖の権威を大変高めている。信用を高めている。実は新宗教教団に特徴的なのは、教団内への教祖(リーダー)の信頼性・信用性を強烈に高めるということが非常に重要なのです。その2つの客観的機能を皆さんが果たしていращやるということを指摘することについて.....。それでもう終わります。時間もないですし。

【テーウェン】 それに対しても、私はちょっと答えさせていただきたいと思いますが、いいですか。

【司会（ヘイヴンズ）】 はい。では、ちょっとで。

【テーウェン】 ですから、ここで残念だと思うのは、深見東州氏が理事でもない団体の紹介をして、しくじったかもしれないのですが、本当に議論したかったのは、神道国際学会が指向しているような神道研究のネットワークがどういうものなのか。オープンで国際的であるということ。それで、狭い神道学をつくっていくのではなくて、広い意味での交流を、ということです。ですから、神道家ではない人たちに「神道的なもの」に注意を払ってもらおうという考え方、別に深見氏がいるから、そういうことはいけない方法だというのでは意味がない話で、これからのCOEプログラムの示唆にもならないし、おもしろくない話だと思いますね。ですから、これからのCOEプログラムのネットワークづくりを考えるのには、これが示唆になるのではないかということが言いたかったので、それについての議論が全くなく終わってしまったのが残念だと思います。以上です。

【司会（ヘイヴンズ）】 確かに議論の多い課題であるだけに、この短い時間で済ませることはできません。いずれにしても、その学会のやり方といいますか、そのオープン性は1つの例として学ぶことがあるのではないかというのが、テーウェンさんの立場だと思います。ありがとうございました。（拍手）